

話題化現象各論

山 本 久 雄

1. 序

言語には、同一文中に複数の wh- 句が現われる多重-wh- 疑問文が存在し、その分析に対し様々な提案が試みられている。(1)はその英語の例である。

(1) Who wonders where we bought what?

(1)の文は複数の読みが可能である。what が広い作用域と狭い(埋め込み節内での)作用域をもつ解釈である。それに反し、where は狭い作用域のみの、who は広い作用域のみの解釈をもつ。これは、where が、論理形式(Logical Form, 以下 LF)で、主節の COMP (あるいは CP の指定辞の位置)に移動できないということを意味する。この事実は、どのような原則により説明されるのか。

また、ある文法家に従えば、次の2文には解釈上の違いが見られる。

(2) Someone thinks that Mary solved every problem.

(3) Someone thinks that every problem, Mary solved.

(2)の文で、every problem は、幾分マージナルではあるが、広い作用域をもつことが可能である。一方、(3)においては、その解釈は不可能となる。every 句は、補文内での解釈しか許されない。この違いは何故生じるのか。(2)と(3)を比較すると、後者の every 句は、話題化操作 (topicalization) によりシンタックスで移動しているが、前者の文ではその操作が適用されていないとい

うことがわかる。(2)の文の多義性は every problem が LF で主節に移動するために生じ、(3)では、同句の LF-移動が不可能なため一義的解釈になると主張する分析は、何故話題化が島 (island) を形成し、以後の LF-操作を阻止するかを説明しなければならない。これを扱う独立原則は何か。

Epstein (1992) は、多重-wh-疑問、話題化の適用有無に関する数量詞の解釈の違いを統一的に処理する原則として、Chomsky (1995) が提案する経済性の制約 (Economy Constraint) の妥当性を主張する。

他方、Müller and Sternefeld (以下、M & S) (1996) は、経済性の制約に基づく分析の不備を指摘し、上記の問題は、彼らが提案する一義的束縛の原則 (Principle of Unambiguous Binding, 以下 PUB) により解決可能であると論じている。

本論文は、次節で Epstein の分析に簡単に触れ、第3節及び4節で、M & S の PUB にも理論上の問題点があるということを議論する。第5節では、最小主義者プログラム (Minimalist Program, 以下 MP) に基づく話題化の分析を試みる。第6節は結びである。

2. Epstein (1992)

さて、(1)の文で、where が狭い作用域しかもたない事実を Epstein (1992) はどのように説明しているのか。今、where が広い作用域をもつと仮定した場合、その解釈は(5)の LF 表示をもつことになる。(4)は(1)の S-構造である。

(4) [_{S'} who_i [_S t_i wonders [_{S'} where_j [_S we bought what t_j]]]]

(5) [[[where_i] who_i [t_i wonders [(t_j) [we bought what t_j]]]]]

((4)と(5)は、それぞれ Epstein (1992, (2)と(6))。尚、(5)の(t_j)に対し、Epstein は、埋め込まれた COMP にある痕跡は随意的に存在すると仮定している。) (1)の文で where が広い作用域の解釈を許されないということは、(5)の LF 表示が不適格、換言すれば、where の LF-移動が不要であるということになる。

では、この LF- 移動を不要にする要因は何か。彼は 2 つのフィルターを仮定する。ひとつは語彙項目の選択特性に関するものであり、他は [+wh] COMP の選択制限に関するフィルターである。(1)の場合、(6)と(7)のフィルターが関与することになる。

- (6) wonder は [+wh] COMP を選択する。
- (7) 英語において、[+wh] COMP は、S- 構造及び LF で [+wh] 主要部をもたなければならない。

これらのフィルターは、(4)の S- 構造で満たされている。故に、where が狭い作用域をもつ解釈は(4)と同じ LF 表示をもつことになる。一方、(5)の LF 表示は(6)及び(7)のフィルターに反する。(4)の S- 構造(=LF)は、そのいずれのフィルターにも違反しない。where の LF- 移動は不要となる。これは、 unnecessary 移動は禁止される、または、「移動は必要とときにのみ許される」ということを意味する。移動を適用しなければフィルター(のひとつ)に違反する場合、そしてその場合にのみ移動は必要ということになる。Epstein (1992) は、この unnecessary 移動を次の原則により禁止する。

(8) 経済性の制約

最少の α - 操作 (Affect- α) の適用でフィルターを満たせ。

(1)の文、即ち(4)の S- 構造(=LF) は、(6)と(7)のフィルターを満たしている。しかも、この派生は、1 回の α - 操作の適用により生成される適格な派生である。故に、where の LF- 移動は不要となりかつ排除されることになる。これにより、(1)の文で、where が広い作用域をもたないという事実が説明できる。

数量詞の解釈に関する(2)と(3)の対比も、経済性の制約で説明可能と Epstein (1992) は主張する。彼は、話題化は S への付加 (S-Adjunction) と考え、さらに、May (1985) に従い、数量詞繰り上げ (QR) は義務的であり、

その操作は S- 付加であると仮定する。(3)において, every problem は話題化操作を受け, 補文節内の S に付加されている。次に, この数量詞句 every problem は, LF で QR を適用され S に付加されなければならない。しかし, 話題化操作の結果, every 句は既に S- 付加されているため, (3)は S- 構造であると同時に適格な LF 表示の資格をもつことになる。故に, 経済性の制約により, every 句のさらなる移動は不要となり阻止されなければならない。S- 構造のトピックの位置から, LF- 移動により every 句を主節に上昇する必要はない。

(2)の文が(マージナルにせよ)多義的な意味解釈をもつ, つまり, every problem が広い作用域をもつ事実も経済性の制約に基づき説明できる。QR は義務的であるという仮定に従い, every problem は移動しなければならない。逆に言えば, 数量詞句の移動が含まれない派生は不適格となる。それ故, (2)において, every problem を 1 回の操作で主節の S に付加する行為は許される。この操作は LF- 移動であり, その結果生成される表示は適格な LF 表示となる。every 句の LF- 繰り上げは, (関連する) いずれのフィルターにも反しない。(2)が多義的解釈をもつという事実に対し, 自然な説明が与えられる。

以上見たように, Epstein (1992) は, 多重疑問構文や話題化(及び他の一見無関係と思われる種々の現象)も, 経済性の制約により統一的に説明できると主張する。しかし, M & S (1996) は, Epstein のアプローチでは説明不可能な事例があり, 経済性の原則の信憑性を疑問視する議論を展開している。次節では, 経済性の理論の代案として提案される PUB を取り上げ, その是非について議論する。

3. Müller and Sternefeld (1993)

前節で, 経済性の原則が, 多重-wh- 疑問構文, また, 話題化と数量詞解釈との相互作用等を統一的に説明できるという Epstein (1992) の主張を紹介した。しかし, M & S (1996) は, ある状況のもとでは適格な随意的 wh- 移動

が可能である言語が存在するという事実を示し、経済性理論の問題点を指摘している。ここでは、彼らが提示するドイツ語からの反例をあげておく。詳しくは M & S (1996) を参照。

M & S (1996) によれば、ドイツ語には部分的 wh- 移動が存在し、それが経済性のアプローチにとって問題となる。wh- 句の連続的循環長距離移動に加え、[-wh][Spec, C] への短距離移動がオプションとして可能である。後者の場合、主節の [+wh] の位置に作用域標識の was が現われる。(9)は長距離移動の、(10)は短距離移動の例である。

(9) Wen_i meinst du [_{CP} t_i daß sie wirklich t_i liebt]?

(10) Was_i meinst du [_{CP} wen_i (daß) sie wirklich t_i liebt]?

((9)と(10)は、それぞれ M & S (1996, (17a)と(17b))。尚、M & S による英語の注釈は省略。) (10)で、埋め込み節の [-wh][Spec, C] の位置を占めている wen は、Wh- 基準 (Wh-Criterion) を満たさなければならず、そのため、S- 構造において was が占める [+wh][Spec, C] の位置に LF- 移動する必要がある。しかし、この派生は2度の移動操作を含むことになる。それに対し、同じ [+wh] の目標地点への移動は、(9)で示すように、1回の操作で可能である。従って、もし経済性の制約を受けるならば、(10)の派生は阻止されるはずである。部分的 wh- 移動構文の存在は、経済性の原則にとって問題となる。

また、M & S (1996) は、ドイツ語の wh- 命令文をあげ、その随意性が経済性の分析を疑わしいものにする主張している。

(11) [_{CP}-Sag mal [_{CP} wen_i (daß) du t_i getroften hast]]!

(12) [_{CP}Wen_i sag mal [_{CP} t_i daß du t_i getroften hast]]!

((11)と(12)は、それぞれ M & S (1996, (20a)と(20b))。尚、M & S による英語の注釈は省略。) (11)は埋め込まれた wh- 節をもつレギュラーな命令文であ

る。(11)で、wen は、S- 構造の段階で [+wh] の位置に移動しており、これ以上の (LF) 移動は必要としない。しかし、口語ドイツ語では、wh- 句が主節の [-wh][Spec, C] に S- 構造で随意的に上昇することが許される。(12)を見よ。この場合、wen は、LF で補文の [+wh] の位置に移動 (LF- 下降) しなければならない。さもなければ Wh- 基準の違反が生じることになる。この派生は 2 度の操作が適用されることになり、経済性の原則により阻止されなければならない。(12)に比べコストの低い(11)の派生が存在するからである。故に、ドイツ語の wh- 命令文も、Epstein (1992) の経済性に基づく分析に一石を投じることになる。

以上、経済性の反例として M & S (1996) が言及する現象のうち 2 つを紹介した。もし、彼らが主張するように、経済性の原則が上記の現象を説明するために十分機能しないとすれば、それに代わるアプローチが必要となる。しかもこの代案は、ドイツ語の部分的 wh- 移動及び wh- 命令文(さらには経済性に対するその他の反例)ばかりでなく、経済性により説明可能な現象をも処理できるものでなければならない。M & S (1996) は、その方法として PUB を提案する。しかしながら、この原則は既に Müller and Sternefeld (以下、M & S) (1993) で提案されている。従って、ここでは、まず M & S (1993) の分析を検討し、彼らの主張する PUB にも問題点があることを指摘する。その後、第 4 節で、再び M & S (1996) に関する私見を述べることにする。

M & S (1993) は、Chomsky (1981) の束縛理論の原則 C では説明できない不適切な移動があり、それは、彼らが提案する PUB により説明可能であると主張する。

(13) 一義的束縛の原則

α -束縛される変項は、その連鎖 (chain) の先頭要素の領域内で β -自由でなければならない。(この場合、 α と β は異なるタイプの位置を指す。)

((13)は M & S (1993, (1)). M & S (1993, p.461) によると, 「 α -束縛」の意味が「タイプ α の位置からの束縛」ということであれば, (13)は, ある特定のタイプの \bar{A} -移動(たとえば β -位置への移動)は, 別のタイプの \bar{A} -移動(たとえば α -位置への移動)を給与(feed)してはならないということを含意することになる。この原則に従えば, VP-あるいは IP-付加された wh-句は, その後 [Spec, C] への(代入)移動操作を受けることができない。もとの位置に残された変項が, (VP-付加あるいは IP-付加の位置と [Spec, C] の位置から) 多義的に解釈されるからである。また, その逆の移動も不可能となる。さらに, ある wh-句に 2 回(以上)の付加操作が適用されることも許されない。PUB の定義に従えば, 移動先の範疇が異なると変項は多義的に解釈されることになる。以下で後者の例を見てみよう。

M & S (1993) は, ブルガリア語では優位性 (superiority) の効果が見られるがポーランド語にはそれが無いという事実に対し, PUB に基づく説明を提案する。(14)はブルガリア語の, (15)はポーランド語の例である。

(14) a. [_{spec} [_{spec} Koj_i] kogo_j] [_{IP} t_i vižda t_j]? (S-構造)

b. * [_{spec} [_{spec} Kogo_j] koj_i] [_{IP} t_i vižda t_j]? (S-構造)

(15) a. [_{CP} Kto_i [_{IP} co_j [_{IP} t_i robił t_j]]]? (S-構造)

b. [_{CP} Co_j [_{IP} kto_i [_{IP} t_i robił t_j]]]? (S-構造)

((14a, b)は M & S (1993, (20a, b)). (15a, b)は M & S (1993, (21a, b)). 尚, M & S による英語の注釈は省略。) (15a)では co が, (15b)では kto が [Spec, C] に LF-移動しなければならない。さもなければ, それらは演算子としての解釈を受けることができなくなる。(16)は LF-移動後の表示である。

(16) a. [_{CP} [_{spec} [_{spec} Kto_i] co_j] [_{IP} t'_j [_{IP} t_i robił t_j]]] (LF)

b. [_{CP} [_{spec} [_{spec} Co_j] kto_i] [_{IP} t'_i [_{IP} t_i robił t_j]]] (LF)

((16a, b)は M & S (1993, (22a, b)).) M & S によれば、ブルガリア語は語順自由の言語であり、wh- 移動は IP- 付加を利用できることになる。ポーランド語も同じ IP- 付加が可能であるとすれば、両言語の優位性に関する文法性の違い ((14)と(15)の比較) は何故生じるのか。M & S は、PUB はすべての言語において S- 構造の表示を制約すると仮定する。さて、ブルガリア語は、すべての移動は S- 構造で起こるという特徴をもつ。従って、この言語の S- 表示に PUB 違反が生じることになる。(14b)の S- 構造は、IP- 付加を適用した場合、(17)の表示をもつことになる。

(17) *_{[Spec} [_{Spec}Kogo_i] koj_i] [_{IP}t_i [_{IP}t_i vižda t_j]]? (S- 構造)

((17)は M & S (1993, (24)).) (17)で、変項 t_i は、t_i 及び kogo_i に束縛される。両束縛者は、共に付加という同じ操作を受けている。違いは、前者は IP への付加、後者は[Spec, C]への付加という点である。(17)は S- 構造であり、PUB がこの表示を排除するためには、移動プロセスそのものではなく、移動先の範疇の違いが PUB 違反を起こしていると考えなければならない。M & S による PUB は、移動先の目標となる範疇の違いをもその定義の中に含むことになる。尚、彼らは、(14a)の適格性を次のように説明する。目的語の位置にある変項 t_j は、動詞により適正統率されている。主語の変項 t_i は、[Spec, C]の位置にある koj により先行詞統率され、いずれの痕跡も空範疇の原則(ECP)に反しない。故に PUB は無関係となる。(14b)で、PUB が発動される理由は、主語変項の t_i は[Spec, C]内の koj により先行詞統率されず、ECP 違反となるからである。つまり、(14b)の IP が t_i にとって障壁(barrier)となり、その障壁性をくずすため IP- 付加が利用される。しかし、この時、上述したように、PUB がその S- 表示を排除し、(14b)の文は適格な派生をもつことができず、容認不可能となる。ついであるが、(14b)で、t_i が koj_i により先行詞統率されないのは、この統率が厳密 c- 統御を要求し、それに従えば、付加された要素はその位置から痕跡を c- 統御できないということによる。優位

性の効果が見られないポーランド語の場合、シンタックスで IP- 付加された wh- 句は、引き続き LF- 移動が可能でありかつ義務となる。加えて、現段階では、PUB の適用は S- 構造のレベルと仮定しているので、LF- 移動で生成される表示に PUB は適用されない。それ故、(16b)において、 t_i は、 t'_i と kto_i により多義的に束縛されているが、PUB 違反とはならない。そして、 t_i は t'_i により先行詞統率されるので ECP 違反も生じない。その結果、(16b)は適格な構造となり、対応する文は容認可能となる。

これまでの M & S (1993) の分析から、PUB に関して帰結される重要なポイントは、2つの移動が、たとえ同じタイプの操作（たとえば共に付加移動）であったとしても、移動先が異なる範疇（たとえば IP と [Spec, C]）であれば、PUB 違反になるということである。

次に、M & S (1993) が PUB に基づき説明するロシア語の例を見てみよう。ロシア語は、定(finite)の wh- 島からの長距離かきまぜ現象(scrambling)を許す言語である。

(18) Ty [_{VP}doktor_i [_{VP}videl [_{CP}kogda [_{IP} t_i pod"ezžal]]]]?

((18)は M & S (1993, (11a))。尚、M & S による英語の注釈は省略。) (18)で、doktor は、シンタックスの段階で、wh- 補文節からかきまぜ操作により主節の VP に付加されている。(M & S は、かきまぜは付加操作と考えている。) [Spec, C] の位置を脱出口として利用することが考えられるが、これは M & S の枠組では不可能である。故に、彼らは、ロシア語のかきまぜ操作は、CP- 付加を利用すると仮定する。

(19) ...[_{VP}doktor_i [_{VP}...[_{CP} t'_i [_{CP}kogda c [_{IP} t_i ...]]]]]]

((19)は M & S (1993, (11a'))。)) (19)で、CP- 付加が CP の障壁性を無効にする。また、変項 t_i は PUB に違反しない。付加位置からのみ束縛されているからで

ある。M & S は、ロシア語の長距離かきまぜ現象をこのように説明する。しかし、彼らが提示する分析には問題があり、その原因は、PUB の定義に生じる矛盾にあるということを以下で議論する。

ブルガリア語とポーランド語の間に見られる優位性の効果の違いを説明するため、M & S (1993) は、彼らが提案する PUB に依拠した。この場合、同じ付加操作であっても、着地点の範疇が異なれば PUB が発動する、換言すれば、移動の目標範疇の違いが PUB 違反を引き起こすということを主張することになる。他方、ロシア語の長距離かきまぜ現象の適格性を説明するため、彼らは CP- 付加、それに続く VP- 付加を導入し、PUB 違反は生じないと議論した。ブルガリア語の優位性効果、そして、ロシア語のかきまぜ現象の説明で、M & S は共に付加操作を利用している点に注意せよ。しかし、前者では、付加移動の目標範疇が異なるために PUB 違反が生じると主張するのに対し、後者においては、付加移動先が異なるにもかかわらず、PUB 違反は起こらないと述べている。明らかに、彼らの説明には矛盾が見られる。これは、PUB の定義中の「異なるタイプの位置」が明確に規定されていないことを示す。従って、ブルガリア語の優位性効果とロシア語のかきまぜ現象に対する M & S (1993) の説明は、きわめてアド・ホックといわざるをえない。そもそも、PUB の定義における異なるタイプの位置 α と β はどのようなものか。3通りのタイプが考えられる。

- (20) a. 着地点は同じだが操作が異なる位置。
- b. 着地点は異なるが操作は同じ位置。
- c. 着地点も操作も異なる位置。

(20b)を採用すればブルガリア語の例は説明できる。同じ付加操作が適用されてはいるが、着地点が異なるため PUB が発動される。しかし、ロシア語の例は説明できない。(20c)を採用すれば両言語とも説明不可能となる。条件のうち一方は満たすため、すなわち、同じ付加操作の適用となり、PUB 違反に

はならないからである。(20a)は、(1)の文で、where が主節の解釈をもたないことを説明するために必要となる。結局、PUBにおける異なるタイプの位置 α と β は、少なくとも(20a)及び(20b)の特性を必要とする。しかし、(20b)を定義に導入した場合、上記の問題が生じることになる。

さらに、M & S (1993) が提案するロシア語のかきませ現象の分析に対して別の問題点を指摘しておく。彼らは、ロシア語は CP- 付加のオプションをもつと仮定し、そのため、かきませ現象は PUB 違反を起こさないと主張した。しかしながら、Chomsky (1986) によれば、付加操作は、非項(nonargument)への移動のみが可能となる。(18)において、埋め込まれた wh-CP が動詞videlの項(argument)であるならば、そして、その文意から、この考え方は正しいように思われるが、CP- 付加は項への移動ということになる。もしChomsky が正しいければ、M & S が仮定する CP- 付加はロシア語でも採用されないことになり、ひいては、そのオプションを利用する PUB 分析も効力を失うことになる。たとえ、2回の移動が共に付加で、その結果 PUB 違反が生じないという主張を支持するとしても、その基盤となる CP- 付加が認可されないからである。項への付加が許容される理論を考えたとしても、PUB の定義を矛盾の生じない明確なものにしない限り、M & S (1993) の分析は説得力をもたないことになる。

ブルガリア語及びロシア語の例からだけでも、M & S (1993) の PUB 分析には欠陥があることがわかった。繰り返しになるが、その第一の問題は、「異なるタイプの位置」が不明確であるという点である。M & S (1996) は、その内容をより明確にした PUB の定義を提案し、これに基づき、Epstein (1992) の経済性理論を批判している。次節では、M & S (1996) に見られる \bar{A} -移動の分析に目を向け、彼らのより明確な PUB の定義にもやはり問題があるということを議論する。(Culicover (1996) は、他の側面から M & S (1996) の PUB 分析を批判している。)

4. Müller and Sternefeld (1996)

前節で紹介したように、M & S (1996) は、Epstein (1992) の経済性分析に代わる方法として、M & S (1993) で提案された PUB を導入する。この原則により、Epstein では説明不可能な例も含め、種々の \bar{A} -移動現象が説明可能であるというのが彼らの主張である。本節では、PUB 及びその原則が依存する着地点（あるいはターゲット）のタイプに対し、やはり問題が生じるということを議論する。

M & S (1996) が提案する PUB は、M & S (1993) で提案されたままのものであるが、新たに着地点のタイプが明確に規定されている。

(13) 一義的束縛の原則

α -束縛される変項は、その連鎖 (chain) の先頭要素の領域内で β -自由でなければならない。(この場合、 α と β は異なるタイプの位置を指す。)

(21) 移動の着地点

- a. S-構造の wh-移動は、[Spec, C] での代入である。
- b. LF での wh-移動は、[Spec, C] での代入か、または、[Spec, C] が既に満たされているならば、[Spec, C] への (右方) 付加である。
- c. ゲルマン語の話題化は、[Spec, T] での代入である。(この場合、TP は CP と IP の間の最大投射であり、T は動詞第二要素現象 (verb-second, V2) 移動の着地点である。) 以下略。
- d. かきまぜ操作は XP への左方付加である。(ドイツ語及び朝鮮語では VP または IP。)

((21a, b, c, d) は M & S (1996, (33a, b, c, d))。尚、TP は、時制句 (Tense Phrase) ではなく話題句 (Top Phrase) であることに注意。) PUB が、経済

性の原則では説明できない現象をどのように処理するか見てみよう。例として、(10)で示したドイツ語の部分 wh- 移動構文にもどる。(22)は、(10)に適用される移動過程を示す。

(10) Was_i meinst du [_{CP} wen_i (daß) sie wirklich t_i liebt]?

(22) [_[Spec,C] wen_i]... [_{CP} [_[Spec,C] (t_i)...t_i]

主節の [Spec, C] は [+wh] の素性をもつ。故に、埋め込み節の [-wh] の位置にある wh- 句は、LF で主節の [Spec, C] に移動する。ドイツ語の作用域標識 was は虚辞 (expletive) であり、LF で消去されなければならない。さもなければ、それは非合法的な対象物として存在することになる。この消去は代入により遂行されると仮定する。それ故、M&S(1996)の説明によれば、(22)において、t から t' への移動も、t' から主節の [Spec, C] への移動も、共に代入操作ということになり PUB に反しない。同様に、ドイツ語の wh- 命令文も PUB により正しく分析できることになるが、彼らによるその説明は省略する。

次に、英語における wh- 話題化の非文法性を取り上げる。M&S は、PUB に基づきこの事例を説明する。

(23)a. *Who_i said t_i [_{CP} that [_{TP} [_[Spec,T] who_j] T [_{IP} John likes t_j]]]?

b. * [_[Spec,C] [_[Spec,C] who_i] who_j]... [_{CP} [_{TP} [_[Spec,T] (t_j)...t_j]]]

((23a, b) は M & S(1996, (36a, b)).) (23a) で、who_j はシンタックスで [Spec, T] に移動する。LF で、この wh- 句は主節の [+wh] の位置に移動しなければならない。多重疑問を形成するためである。しかし、(23b)で示すように、この位置はすでに who_i により (シンタックス) で満たされている。故に、who_j の LF- 移動は [Spec, C] への付加ということになる。(23b)の α 及び β がこ

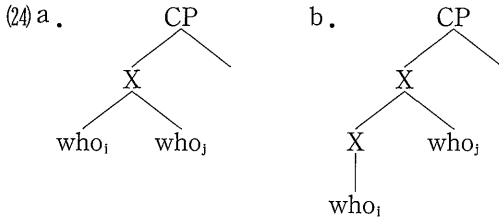
のプロセスを示す。従って、 t_j は多義的に束縛され、PUB 違反が生じる。ドイツ語の部分的 wh- 移動も含め、英語の wh- 話題化現象も、経済性に頼ることなく PUB から帰結されることになる。

このように、一見したところ、PUB は \bar{A} -移動に関する諸現象を正しくとらえるように思われるが、問題がないわけではない。特に、それが依存する着地点は考慮すべき余地がある。以下ではその問題点に目を向ける。

M & S (1996) が提案する着地点のひとつに [Spec, C]- 付加がある。(21b)を見よ。(23a)の非文法性の説明では、この付加位置が重要な役割を果たしている。(ついでに言えば、(1)における where の問題も(23b)と同様の説明が与えられるが、それは後に言及する。) (23b)において、変項 t_j は多義的束縛を受けるが、その束縛者のひとつが [Spec, C] に付加された who_i となる。ここで取り上げるべき問題は、この [Spec, C]- 付加が理論的妥当性をもつかどうかである。もし、この操作が容認不可能なプロセスということになれば、(少なくとも)それに基づく英語の wh- 話題化現象の説明に際し、PUB はその効力を失うことになる。

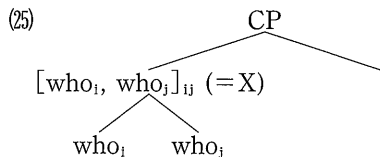
さて、M & S (1996) によれば、(23b)で、 who_j は LF で [Spec, C] に付加される。Chomsky (1986) で仮定された付加の定義に従えば、その着地点は最大投射 (XP) に限定されることになる。つまり、付加は(統語的) 範疇節点 (たとえば VP) への移動となる。しかし、[Spec, C] というのは、いわゆる範疇ではなく、「主語」・「目的語」と同じく文法機能のひとつであり、「指定辞」という独立した統語範疇は存在しない。では、M & S (1996) が用いる [Spec, C]- 付加というのは、いかなる操作になるのか。上記の考えに従い、[Spec, C] は統語範疇としての資格をもたず、かつ、付加は統語範疇のみを移動のターゲットにすると仮定する。(23b)で、主節主語 who_i はシンタックスで [Spec, C] に移動する。このプロセスは代入操作であり、それ自体問題はない。 who_j が LF で [Spec, C]- 付加をするという提案は、[Spec, C] そのものは利用できないため、考えられるのは who_i への(右方)付加ということになる。 who_j による who_i への付加はどのような構造を派生するのであ

ろうか。それは、 who_i と who_j が、付加の結果、単一の構成素を形成することになるのか。もしそうだとすれば、 who_i と who_j が、ある意味で、一語を形成するのと同じ作用を受けることになる。(24)はその（ポテンシャルな）派生構造を示す。



まず(24b)の構造を考えてみよう。この場合、前述の仮定により、X は[Spec, C]ではないとすれば、それはいかなる範疇となるのか。現時点では、このXに相当する範疇ラベルを想定することは困難あるいは不可能に思われる。故に、M & S (1996) による who_j の [Spec, C] への付加、ひいては、[Spec, C]-付加一般の分析は支持しがたい。

PUB の定義で重要な役割を果たすもうひとつの概念は「束縛」である。(23b)で、変項 t_j が多義的束縛を受けるということは、LF で付加された who_j も t_j を束縛するということを含意する。この束縛関係は、前節で見た先行詞統率と同じ概念のものであるならば、厳密 c- 統御の条件のもとでは許容されないものとなるはずである。さらに、 who_i もその変項を束縛するということは、代入操作を受けた wh- 句も、M & S (1996) の方式で [Spec, C]-付加された wh- 句も、それぞれの変項に対する束縛能力の点では同等になる。この同等の束縛力を理論的に許可するためには、演算子合併(absorption)のようなプロセスが必要となる。May (1985) を参照せよ。この操作により、付加された wh- 句も、資格の上では、(それに先立ち)代入された wh- 句と同じ機能をもつ。これを応用すると、(24b)の上位の X は $[\text{who}_i, \text{who}_j]_{ij}$ となり、結局、それは(24a)と同じ表示をもつことになる。



(25)が意味するところは、 who_i も who_j も共に CP の指定辞として機能するというものであり、それは、付加された who_j も、最終的には代入操作を適用されているにすぎないということである。まとめれば、束縛の観点から見た場合、M & S (1996) が規定する着地点のタイプとして [Spec, C]-付加は存在せず、[Spec, C] への代入に包含され、その二者を区別する必要はないということである。もしこのシナリオが正しければ、英語の多重-wh-疑問文の多義性に関する事実は、PUB では説明不可能となる。(4)を見よ。

(4) [_{S'}who_i [_St_i wonders [_{S'}where_j [_Swe bought what t_j]]]]

(S'=CP, S=IP_o.) (4)で、where が主節を作用域としてもたない事実は、M & S (1996, p.499) によれば、変項 t_j が多義的に束縛され、PUB 違反が生じるためということになる。where が広い解釈をもつためには、LF で主節に移動しなければならない。彼らの着地点の規定によれば、where は主節の [Spec, C] に (右方) 付加され、 t_j は、代入により [Spec, C] の位置を占める t'_j と、[Spec, C]-付加の位置にある where により多義的に束縛されることになる。しかし、上述の私見に従えば、[Spec, C]-付加は [Spec, C] への代入に還元され、 t_j も where も共に代入操作を受け、異なるタイプの移動とはならず、PUB の違反は起こらないことになる。束縛の観点からも、PUB 分析には理論上の問題が生じることになる。

前節で、ブルガリア語とポーランド語の優位性の違いに対する PUB 分析には疑問の余地があると論じ、その際、着地点の明確な規定が必要であるということを指摘した。M & S (1996) ではその明確な規定が与えられている

が、彼らはこの優位性の問題を扱っていない。ここで、彼らの枠組で、この現象がどのように分析されうるかを考察してみよう。さて、ブルガリア語は優位性の効果を示すということを思い出せ。

(14b). *_[SpecC] [_[SpecC] Kogo_j] koj_i] [_[IP] t_i vižda t_j] ? (S- 構造)

M & S (1993) と同様、ブルガリア語は語順自由の言語であり、IP- 付加を利用すると仮定する。この移動は、定義によりかきませ操作とみなされる。(14b)で、koj は、まず IP- 付加を適用され、その後[Spec, C]に付加される。この場合、変項 t_i は多義的に束縛される。M & S (1996) の着地点に関する定義(21)によれば、この2つの操作は異なるタイプの移動となるからである。(それぞれ(21b)と(21d)。)ポーランド語の例は、M & S (1993) の分析と同じく、LF では PUB が適用されないためその違反は起こらないということになるであろう。これまでのところ、M & S (1996) の着地点の定義に問題はないように思われる。では、(18)のロシア語に関してはどうか。ロシア語は CP- 付加のオプションを利用すると仮定し、引き続き VP- 付加が行われると考えた場合、この2つの操作は異なる範疇をターゲットとし、それは、M & S (1993) の枠組では PUB 違反になるのではないのかということを前節で論じた。同じ付加操作であっても、ブルガリア語の事例では、移動先のターゲットが異なれば PUB 違反になり、それが優位性の説明として利用されるなら、ロシア語の場合でも、移動先のターゲットが異なるので PUB 違反を生じるはずであるというのがその主旨であった。しかし、(21d)では、かきませ操作の移動先は XP と規定されている。これに従えば、2回以上のかきませ操作は、たとえそれぞれ着地点が異なっていたとしても、それが最大投射であれば、(21d)の定義を満たすことになる。故に、M & S (1993) に対して前節で述べた着地点の不明確さから出てくる問題は、M & S (1996) では解決されることになる。

最後に、M & S (1996) の PUB 分析に関する問題点をもうひとつあげて

おく。彼らは、PUBに基づき、日本語の *kadooka* が *wh*-島を形成する事実を説明している。

(26) a. **Kimi-wa* [_{CP} *John-ga naze sore-o katta kadooka*] *siritai no?*

b. * [_{CP} [_{Spec} *naze*_i] ... [_{CP} [_{Spec} *kadooka*] ... *t_i* ...] ...]

((26a, b)は M & S(1996, (46a, b))。尚, M & S による英語の注釈は省略。) (26a)で、補文内の疑問詞 *naze* は、[+wh] 素性をもつ主節の [Spec, C] に LF で移動しなければならない。LF-移動は連続循環的に適用されるという Lasnik and Saito (1984) の考えを取り入れ、M & S は、(26b)に対して以下の分析を提案する。(26b)で、*naze* は [Spec, C] に付加しなければならない。その位置は、既に *kadooka* により埋められているからである。次に、*naze* は主節の [Spec, C] に移動する。この操作は代入となる。その位置は空だからである。故に、(21)の定義により、この2つの操作は PUB 違反を起こすことになる。

ここで、彼らの分析には問題があると思われ、それを論じてみたい。それは、PUB そのものよりも、むしろ *kadooka* に関するもの、具体的には、(26b)で *kadooka* が現われる場所の問題である。M & S (1996) によれば、(26b)で、*kadooka* は補文の CP-指定辞の位置を占めている。その結果、*naze* は [Spec, C] に付加されることになり、ひいては、PUB 違反が生じることになる。つまり、彼らの分析では、*kadooka* が占める場所が重要となる。通常、英語の *whether* は補文標識とみなされている。日本語の *kadooka* が、英語の *whether* に相当し、それと同じ地位をもつとすれば、*kadooka* も補文標識として、それ故、CP の主要部 (head) として扱われるべきである。この考えを踏襲するならば、*kadooka* (= *whether*) は、(26b)において、[Spec, C] ではなく C-主要部の位置に存在し、[Spec, C] は空となる。この場合、*naze* の循環連続移動はすべて代入操作となり、その痕跡 *t_i* は一義的に束縛され、PUB 違反とはならない。あくまで PUB を有効にするためには、*kadooka*

は、naze が移動する前に主要部の位置から [Spec, C] に代入され、その位置を占めることが必要となる。この kadooka の移動が、ただ PUB の適用を可能にするためだけではなく、他の独立した理論的原則により強制されるものであるということが立証されれば、PUB に基づく(26)の分析は支持できるものとなる。この立証が不可能な限り、PUB そのものではないが、PUB に依存する M & S (1996) の提案は、(26)の説明として妥当性を失うことになる。

英語の例から、補文標識が [Spec, C] に移動しなければならない要因を考察してみよう。

(27) I do not know whether he will come.

英語の whether は、[+wh]素性をもつ補文標識と仮定する。(27)で、補文 CP もまた [+wh] 素性をもつと考える。MP 理論の枠組では、[+wh] は強素性であり、排出 (Spell-Out) 以前に照合されかつ消去されなければならない。この照合操作は、指定辞－主要部関係に基づき行われる。そのため、whether は補文の [Spec, C] に移動し、C- 主要部と指定辞－主要部関係を成立させ、whether 自らの [+wh] 素性と CP (の主要部) がもつ [+wh] 素性の両方が照合される。つまり、補文標識の移動を義務的にしている要因は素性照合ということになる。

別の要因として語彙項目の選択関係が考えられる。Epstein (1992) によれば、この選択は LF で適用される。これは、[+wh]をもつ CP 補文では、その [Spec, C] に [+wh] の wh- 句が存在することを意味する。

(28) I wonder who you met.

(28)で、who はシンタックスで補文の [Spec, C] に移動し、同時に LF でもその場所を占める。これにより、wonder の選択関係は満たされる。(27)にもどる。know も [+wh] 補文を選択するとすれば、その [Spec, C] には、LF で、

[+wh]素性をもつ要素が存在しなければならない。whether がその役割を果たすことになる。しかも、この移動は、選択関係を満たすため義務的となる。

この考え方を押し進めれば、間接疑問補部節で、(他の) wh- 句が whether と共存しない理由を説明できる。

(29) a. *I do not know whether who will come.

b. *I do n know who whether will come.

(29a)で、whether は、know の選択関係を満たすためシンタックスで補文の [Spec, C] に移動する。who は、[+wh] 素性をもつため排出以前に [Spec, C] に移動し、その素性を照合・消去しなければならない。故に、who もまた補文の [Spec, C] に移動する必要がある。指定辞—主要部関係を成立させるためである。付加操作によりこの関係を満たすことができるのは、主要部から主要部への移動に限定されると仮定する。動詞が AgrO 主要部に付加移動し、[Spec, AgrO] に上昇する目的語 NP の格 (Case) 素性を照合することができるのは、動詞の移動先が主要部であり、この制限に合致するからである。しかし、(29a)における who の移動先は、主要部ではなく指定辞の位置である。故に、who は代入により移動しなければならない。[Spec, C]-付加操作は認めない。(上述。) CP-付加もまた不可能である。(同じく上述。) しかしながら、who の代入先は既に whether により埋められているのでその移動は許されないことになる。who の [+wh] 素性は照合されないまま残り、派生は崩壊 (crash) する。(29b)も同様の説明が可能。まず who が補文の [Spec, C] に移動する。これにより、know の選択関係及び who の [+wh] 素性の照合は満たされる。しかし、whether も [+wh] 素性をもち、それを照合するため [Spec, C] に代入されなければならない。前述の議論によりこれは不可能である。このように、選択関係もまた、補文標識 whether の [Spec, C] への移動を義務的に要請する要因となる。選択関係は LF で満たされ、さらに、LF は、シンタックスと異なり、普遍的レベルと考えられるので、日本語

の kadooka も英語の whether と同じ特性をもつのであれば、同様の分析が適用されてしかるべきである。

まとめれば、素性照合あるいは選択関係(後者は前者への還元可能性あり)により、(26b)で、kadooka が [Spec, C] の位置に存在するという考えは支持できることになる。しかし、これは同時に PUB の不要性をも含意する。連続循環移動を適用するならば、naze は、まず補文の [Spec, C] に移動しなければならない。その位置は既に kadooka が占め、補文 CP の [+wh] 素性は照合済みとなる。naze も自らの [+wh] 素性を照合するため [Spec, C] に移動しなければならないが、その位置への付加操作を認めない上記の考え方が正しければ、naze は適切な照合場所をもつことができず、LF で(26b)の派生は崩壊することになる。

最後に、PUB の反例になると思われる事例に言及しておく。Collins(1994)によれば、エウェ語は、連続循環移動を示す言語であり、さらに、派生の中途段階で [Spec, C] が \bar{A} -移動の痕跡で埋められるならば、三人称単数の代名詞主語の形態が変化するという特徴をもつ。

- (30) [É/*Wo] fo Kɔsi.
he hit Kɔsi

((30)は Collins (1994, (28)).) (30)で、wo が不可能なのは、[Spec, C] への移動が生じていないからである。しかし、(31)では、 ϵ に加え、wo が可能である。

- (31) Kofi ϵ me gblɔ be [ɛ/wo] fo.
Kofi FOC I said that he hit
'It was Kofi_i that I said that he hit t_i.'

((31)は Collins (1994, (31)).) (31)の補文に wo が現われる事実を説明するため、Collins は、Kofi が補文の [Spec, C] を通過し、最終的に主節に移動すると

仮定する。[Spec, C] 内の痕跡が *wo* を (随意的に) 許すことになる。Collins の分析が正しく、また、(31)における Kofi の抽出が話題化の例だとすれば、この移動は [Spec, C] への代入ということになり、M & S (1996) が規定する着地点のタイプに合致しない、あるいはその反例となる。M & S では、話題化は [Spec, T] への代入操作であったことを思い出せ。そうすると、少なくともエウェ語の話題化は、TP ではなく CP を利用することになり、TP の存在そのものが疑問視される可能性が出てくる。もし、すべての言語において、話題化は TP ではなく CP を利用できるということになれば、TP という独立した範疇を設定しそれに依存する PUB 分析は、かなりの修正、場合によっては否定されることになる。あくまでも M & S (1996) の理論を維持する立場をとるならば、さらなる研究が必要となる。

5. MP 理論のアプローチ

第1節で、QP の話題化は、Epstein (1992) の提案する経済性の制約により説明可能ということを見た。QP は、QR の義務的適用というフィルターを満たすため S に付加されなければならない、話題化は、1 回の操作でそのフィルターを満たすことができ経済性の原則に触れることはない。しかし、Epstein (1992, 注 12) は、(33)の文は経済性の理論にとって問題となると述べている。ただし、その解決方法には言及していない。以下で、MP の枠組で可能と思われる話題化の分析を提案してみたい。

(32) I like John.

(33) John, I like.

(33)は何故問題となるのか。補部 NP の John は QP ではない。従って、John の移動をシンタックスで強要するフィルターはない。にもかかわらず、(33)で、John は話題化、すなわち移動の適用を受けている。移動操作が行われていない(32)の適格な文が存在するため、その適用を受けた(33)は、経済性の制約によ

り排除されるはずである。故に、(32)と(33)は経済性の理論にとって問題となる。

MP 理論はこの問題をどのように分析できるであろうか。まず、M & S (1996)と同様、Top-句の存在を仮定する。この句は、AgrSP の上に位置する、つまり、AgrSP は主要部 T(op) の補部と考える。TP は [+Top] 素性を持ち、その素性は強素性と仮定する。強素性であるため、[+Top] は、排出以前の段階で照合され、消去されなければならない。さらに、語彙項目は [+Top] 素性を随意的に与えられると考える。この素性も排出前に照合・消去を必要とする。(33)において、話題化された John は、D-構造 (MP は D-構造レベルを設定していないが、ここでは便宜上使用) で [+Top] 素性を持ち、それを照合するため [Spec, T] に移動する。T と指定辞-主要部関係を結び、双方の [+Top] 素性は照合される。ここで注意しなければならない点は、[Spec, T] への移動が合法的かどうかということである。移動要素とその痕跡間における束縛関係の成立が移動の条件のひとつだとすると、(33)で、John の痕跡は正しく束縛されるかどうかが重要となる。連鎖 (John, t) の間に主語 I が介在する。この主語 NP が t の束縛者となる可能性を考慮しなければならない。Rizzi (1990) の相対的最小条件 (Relativized Minimality Condition, 以下 RMC) に従えば、I は t の束縛者にはならない。t は格が付与される位置にあり、定義上変項とみなされる。つまり、[Spec, T] は \bar{A} -位置ということになる。主語の位置は A-位置であり、RCM により、I は t に対して接近可能な束縛者として機能しない。故に、John の移動は許される。Top-句を仮定した場合、MP 理論は話題化現象を適格に処理できると思われる。しかしながら、前節で見たように、エウエ語の話題化は CP の通過を利用すると思われる、M & S (1996) に関して議論した Top-句の有無の問題は MP 理論にもあてはまることになる。

では、Top-句を設定しない MP 分析は可能であろうか。Epstein (1992) は、QP の話題化は S-付加と仮定した。数量詞を含まない通常の NP の話題化も一様に扱うべきであると考えらるならば、(33)において、John も S-付加されると考えるのが自然である。今、S-付加は、MP 理論では AgrSP-付加と

仮定する。これは、AgrSP も(随意的に) [+Top] 素性をもつということを意味する。(33)で、John は [+Top] をもち、その素性を照合するため AgrSP に移動しなければならない。[Spec, AgrS] は主語 I により埋められているので、John は AgrSP-付加を受けることになる。問題は、付加された位置がターゲットの指定辞とみなされるかどうかである。みなされるならば、John は AgrS と指定辞—主要部関係を形成し、それぞれの [+Top] 素性は照合される。この場合も、John の移動は RMC 違反を生じない。

まとめると、MP 理論は、QP を含む NP の話題化を一様に扱えると思われる。ただし、Top-句を仮定した場合はその存在の有無が、AgrSP-付加分析では付加構造が指定辞—主要部関係を満たすかどうかの問題となる。しかし、この問題のいずれか一方でも解決できれば、MP 理論は話題化現象の分析方法として支持されうる。同時に、PUB 理論への依存は不要であるということになる。

6. 結論

Epstein (1992) は、多重疑問構文の多義性あるいは wh-句の話題化等、いわゆる \bar{A} -移動に関する諸現象は、経済性の原則により統一的に説明できると主張した。 \bar{A} -移動の問題は、過去さまざまな分析が提案されているが、いずれも一長一短があり、そのいくつかは記述的内容にとどまり説明力を有するには至っていない。そのため説明力をもつ独立した原則が必要とされ、それが経済性の理論であるというのが Epstein の主旨である。

一方、Epstein (1992) の主張に対し、M & S (1996) は、ドイツ語の wh-部分移動等、経済性では説明不可能な現象が存在することに着目し、代案として、一義的束縛の原則に基づく分析を試みた。本論文では、経済性理論の是非には触れず、PUB 分析に関する問題を指摘し、M & S の理論もそのままでは受け入れがたいということを論じた。

また、第 5 節では、MP 理論に基づく話題化の分析を提案した。その一案として Top-句を仮定した。しかしながら、エウエ語の話題化(と思われる)現

象は [Spec, C] を利用する可能性があるということから、他の方法も同時に示唆した。それは、新たに Top-句を導入するのではなく、AgrS-範疇が[+Top]素性を持ち、その素性を照合するため話題化要素が移動するというものであった。しかし、この操作は [Spec, AgrS] への付加移動となり、付加構造も指定辞-主要部関係を形成するということが立証されない限り、この提案も即座には受け入れがたいという危険性を孕むことになる。いずれにせよ、PUB 理論に関する問題を考慮すれば、それに依存しない第5節の試案は一考の価値があるように思われる。

参考文献

- Chomsky, N. (1997). "On *wh*-Movement." *Formal Syntax*. Peter Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian (eds.), 71-132. New York.
- Chomsky, N. (1981). *Lectures on Government and Binding*. Foris, Dordrecht.
- Chomsky, N. (1986). *Barriers*. MIT.
- Chomsky, N. (1995). *The Minimalist Program*. MIT.
- Collins, C. (1994). "Economy of Derivation and the Generalized Proper Binding Condition." *Linguistic Inquiry* 25, 45-61.
- Culicover, P. (1996). "On Distinguishing \bar{A} -Movements." *Linguistic Inquiry* 27, 445-463.
- Epstein, S.D. (1992). "Derivational Constraints on \bar{A} -Chain Formation." *Linguistic Inquiry* 23, 235-259.
- Lasnik, H. and Saito, M. (1984). "On the Nature of Proper Government." *Linguistic Inquiry* 15, 235-289.
- Lasnik, H. and Saito, M. (1992). *Move- α* . MIT.
- May, R. (1985). *Logical Form*. MIT.
- Müller, G. and Sternefeld, W. (1993). "Improper Movement and Unambig-

uous Binding.” *Linguistic Inquiry* 24, 461-507.

Müller, G. and Sternefeld, W. (1996). “ \bar{A} -Chain Formation and Economy of Derivation.” *Linguistic Inquiry* 27, 480-511.

Rizzi, L. (1990). *Relativized Minimality*. MIT.